

# おはなしの仕方

きかせるより見せるやう

——週間朝日より轉載——

東京女高師教授 金子彦 二 郎

一

幼児の世界を理解して「幼児にして聞かせるお

話の仕方』これは私どもにとつて専門的な學術講演以上に、氣骨ばかり折れて、しかも成功の收めにくい難題です。世にはお伽講演家といふその道の専門家があつて、そのうまい話し振りで幾百の幼児達をしてまるで吸込まれるやうに聞き惚れさせてゐるやうですが、私は今私の貧しい體驗から、家庭における差し向ひで話してやる場合とか、せいとく四、五十人位の幼児相手の教室かなどでするお話の仕方について二、三の思ひつきを述べ

て見ます。

まづ何より根本的な條件としては、分りきつたことですが子供といふものは、決して大人をそのまゝそつくり縮少した複製品でなく子供にはそれ自身独自の世界があるといふことを理解してゐて、話手の方が出来るだけその世界に入り込み同化してかゝるといふことが大切です。

狂言「末廣がり」にも「下からは上がはからはれぬものぢや」といふ臺詞があります、上記の如き子供の世界に入り込み同化してやるといふことは、いふは易いが中々容易からぬことです。

にかくさうした本當の幼兒愛と親切氣とがあつたら、思ひきつて父母だとか、教師だとかいふ地位に着せてゐる鎧や冑ともいふべき威嚴をすつかり滅却して、態度や言葉や服装などの一部までも幼兒なみになりきつてやることです。堂々たる髭の親爺や丸鬚の母が時に子供の帽子をチョコンと頭の上に載せ、白い風呂敷なんかをエブロン風に胸部に引つけて、一寸甘へた口振りで、『ウマチやうだいな』などいつてやられたら、きつと子供達の親しい仲間——遊び相手——として歓迎されること請合です。

## 二

幼兒に食べ物を當てがふこつて 必要といふことが凡ての發明の母胎です、右に述べたやうなことも人の子の親となつた體驗を持たぬ方には何だ阿呆らしいと嘲笑されるかも知れないが、次のやうな事實に直面したら、その眞理性がうなづけて

頂けやうかと思ひます。それは或畫家によつて描かれた母性愛といつたやうな構圖で、美しい母が可愛らしい幼兒を前にして御飯を食べさせてゐる繪があつて、大層評判が高かつたさうです。それを一人の勞働者風情の男が見て、『こんなうそつばちを描た畫か何でえ!』と噛んで吐き出すやうにけなしつけたので、そのわけを聞いて見ると、『子供に物を食べさせる親は、きつと先づ自分自身が口を開いて見せながら養つてやつてゐるもんだ。所がこの繪のちふくろはきつと口を眞一文字に結んで、子供にだけ口をあけさせてゐらあ、そんな事あるもんぢやねえや。』と答へたとか。聞いて見れば尤もな話。實際子供に物を食べさせる時には、ち箸に何か挟んで、さあち上りといふ時に、殆ど無意識的な自然の勢ひとして、『アーン』と渡す方だ先づ口を開いて、『ムニャ〜〜』と、自分も噛む眞似をするものです。

こんな動作や表情を第三者の位置からでも冷静に観てゐたならば、どんなにか滑稽至極な表情態度に思はれませうが、さうした外観を顧慮することなしに、常に此の場合の此のこつを以てお話をしてやりさへすれば、きつと幼児の心をぐらさないお話が出来ると思ひます。

### 三

具體化が第一 前に述べたことは、つまり言葉なり動作なりをば凡て具體化してかゝれといふことです。言葉にせよ、表情態度にせよ、抽象的概念的な説明をつゞけてゐては、すぐ物飽きする幼児達は、逃げてしまひます。例へば「犬」とか「猫」とか「鳥」とか「牛」とか「鼠」とかいふ概念的な名辭では殆ど何等の興味も起さないがそれを今その幼児達の知識獲得の第一の門戸である聴覺に訴へる仕方では、「ワンワン」とか、「ニャア〜」とか、「カアカア」とか、「モウ〜」とか、「チュウチュウ」

とかいふ風に表現してやると、忽ちきゝ耳を立て乗つて來ます。

『犬がお菓子を食べてチンチンした。』

といふ代りに

「ワンワンがね、オイチイウマウマをアムアムしてね、チン〜しましたよ。」

といふ風にいへば、すぐうなづくものです。更に「オイチイ」といふところに舌鼓を打つ動作でも入れ、「アムアム」には物をムニャ〜咀嚼する時の唇の動作を挿みそれから「チン〜」には、軽く握つた兩手の手頸を並べて一寸胸前に突き出して、犬がチン〜する時の動作でも眞似てやらうものなら、もう目を圓くして共鳴して「またして〜」とアンコールを要求されるに違ひありません。

この具體的にといふことを更に換言するならば、戲曲的にといふことにもなりません。説明でなし

に實演でといふのです。例へば桃太郎の話をしてやるとして

桃太郎が向ふから出て來ました。さうするところから犬が出て行きました。犬は桃太郎にお腰の物は何でもございませうかと問ひました。桃太郎が、これは日本一の黍團子だと答へました。さうすると、犬が一つ下されば家來になつてどこへでもお供しませうといひました。桃太郎が黍團子を一つやつたので、犬は家來になつてついて行きました。

などいふ話しぶりは、いはゆる話の筋を運ぶ話し方で、文章として讀む時には分りがいいが、お話として聞く場合には、一つ／＼の會話に挟まれる『といひますと』『答へました』がうるさくて／＼お話の興味と進行とを滅茶々にぶちこはしてしまふものです。

## 四

目に見えるやうに 上記の桃太郎が犬を家來に召し抱へる一段を差し向しひで話てきかせるものとして、次のやうに話したらどうでせう。

——日本一の桃太郎さんがね、桃のついた旗を脊中に（一寸、右手を右肩の上へ差上げて旗の位置を示し）さして、鬼ヶ島征伐にと（一寸兩肩を交互にそびやかし、口をくひしはり頬をふくらましつゝ強さうな表情身振をして）出掛けて行つたんですよ。さうするとね、道ばたの藪っこ——ほらお隣の裏にある竹藪のやうなね——あゝいふところから、大きな黒いワン／＼がね、——ほらお湯屋の前にも寝てゐる——あのワン／＼がね『ワン／＼』（犬の吠聲のまねをして）『ワン／＼』といつて桃太郎の前へ出 來たのよ。さうして犬『上を見上げる表情で』桃太郎さん／＼、どこへいらつしやるの？』桃『ぐつと反身になつて犬を見下す體で』ナニ、わしか。わしは鬼ヶ島へ鬼

征伐にいくんだ』犬「(右手の尖で、犬が尾をふるやうな手つきをして、顔を上に向けつゝ)へえーそして、そのお腰にあるものは何でござりますか?』

桃「一寸左腰の袋に注目しつゝこれか、これは日本一の黍團子よ。おいしい〜(一寸唾でも呑み込む表情をして)黍團子よ』犬「くん〜鼻で嗅ぐやうな表情をして)ちや、なるほどおいしい〜匂ひがする。(桃太郎を見上げて)一つ頂戴!、お供しませう』桃「頼もしげに犬を見やる風情で)なにお供するツて?(腰の袋から黍團子を取り出す體よろしく、次に犬に投げ與へる手つきをして)それ、つかはずぞ、供いたせ』犬「お辭儀を二三回してから)ワンワン。(食べる動作)アムアム〜」

五

再び目に見えるやうに 要するに、幼児達はどちらかといへばお話を聞くといふよりは見るもの

です。だからお話をしたりやりながら幼児達を注意深く觀察してゐるとよく分りますが、きつと目を鈴のやうに見張つて、中には口まで開いて聞いてゐるものすらあります、さて目に見える様に聞かせる爲には、話し手の顔と體が大いに働かねばならない。をかしい時にはをかしい顔もいるし、怒る時には怒つた顔も悲しい時には泣顔も、威張つた時には威張つた身振もいるし、手つきもいるのです。

このためには前にも述べましたが、幼児に食べ物や當がふ時に、見榮も外聞も構はず先づ自ら口を開いてかゝるやうに、父母とか教師とかいふ威厳や、地位的意識から離れられぬ堅苦しさの一切から解放されて、無邪氣な彼等の世界にすつかり没入してかゝることです。この親切氣と幼兒愛の熱意とがありさへすれば、もう一つの厄介事たる幼兒に分り易い言葉の習得洗練といふことも、當然出來ていくことと思ふ。